

七尾には故郷を思わせる抱擁力がある。

・シャンソン・シンガー 仲代 圭吾氏

第1回のロングラン記念公演で初めて七尾を訪れ、早いもので16年が経ちましたね。兄貴と一緒に歌うようになったのもこのときからでした。昔から兄貴とは仲がいたので、一緒に舞台に立てるのはうれしい限りです。この機会を作ってくれた能登演劇堂や七尾市民の皆さんには本当に感謝しています。

りがあるのかと感動しました。それで「かがり火太鼓」という歌を作ったんですよ。皆さんは住んでいるからわからないかもしれませんが、祭りや食、自然など、すべてが素晴らしい地域。ほかにそうはないですよ。人も温かいですよ。町を歩いていると、家から出てきて「コンサート見ましたよ」と握手を求められる。普通、私が求めるもんなんですよ。けどね。うれしかったですよ。本当にいい人ばかりと会っていますね。「気の毒なあ」という方言も覚えましたよ。この



言葉は何とも言えないやさしい響きですよ。

七尾には故郷だと思いたくなるような抱擁力があるのかもしれません。これからのこの地を大事に思っていきたいですね。



能登演劇堂を根城にずっと演劇を続けたい。

・無名塾 松崎 謙二氏



初めて七尾に来たのは、入塾した昭和62年。中島町鈍打地区の施設に宿泊して、武道館で稽古をするという生活でした。地域のイベントや祭りに参加させてもらったり、青年団の皆さんと座談会をしたりと、市民の皆さんと触れ合う機会が多くて本当に楽しく過ごさせてもらいました。

少し残念なのは昔とは違い、皆さんとの交流が少なくなったような気がする。今回の公演で仲代さんは、前線から一步引いて主導権を僕らに渡そうとしています。僕らもどう受け取り、芝居を通して皆さんとどう関わっていくのかを考えなければならぬ時期がきていると思います。しかし変わらないのはこれからもずっと、能登演劇堂を根城とすること。そして七尾の皆さんといっしょに演劇を楽しみたいと思っています。

東京に生まれ育ったので、七尾での生活は何もかも新鮮で、夢を見ているようでした。そして素晴らしい自然、人、そんな恵まれた環境のおかげで芝居の稽古に集中できたことを思い出します。あれから26年。毎年来ていたので、今では塾生の中で一番七尾歴が長くなりました。「おかえりなさい」「ただいま」という感じで、皆さんが迎えてくれるので、私にとってはもはや第二の故郷。知り合いや友達もいっぱいできました。町を歩いていると、知らない人に会うよりも、知っている人に会うことが多いような気がします。うれしい限りです。



(左)ベンヴォーリオ役 鎌倉太郎、(中央)マーキューシオ役 松崎謙二、(右)ジュリエットの乳母役 西山知佐